

指標名: 化学療法を行っている血液内科患者の転倒率

背景

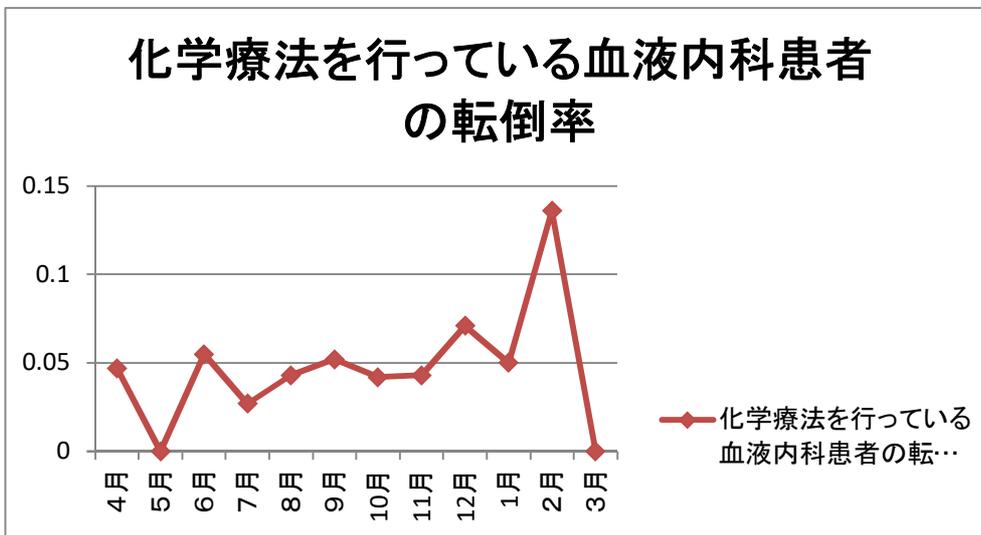
血液内科の疾患は化学療法に伴う血球減少によって転倒時の出血リスクや、多発性骨髄腫などの原疾患によって骨折を引き起こしやすい。また、疼痛のため麻薬などの使用による副作用で転倒リスクが高い状態にあると言える。化学療法を行っている患者は治療の副作用による悪心、嘔吐、貧血、全身倦怠感があり、化学療法非施行患者と比較し転倒オッズ比が6.5と有意に高い研究報告がある。そこで化学療法を行っている血液内科患者の転倒率を質指標と定め、看護介入によって転倒による外傷や骨折を起こすリスクを低減させていく。

データの定義

対象患者: B8病棟で化学療法を行っている血液内科患者
 分子: B8病棟で化学療法を実施している患者で転倒したのべ回数
 分母: B8病棟血液内科入院中で化学療法を実施しているのべ患者数

2018年度のデータ

転倒率4.28% (2018年4月から2019年3月)



参考データ

2017年度のデータ: 転倒率 5.2% (8件/153人) (2017年4月～2018年3月)
 2016年度以前のデータはなし。

評価

前年度から入院時のナースコール指導や、患者の状況をカンファレンスで共有し早期から離床センサーを使用したり、看護計画を立案するなど転倒予防へのスタッフの意識は高くなっている。また、今年度からベッドセンサーが導入されたことで、同一患者の転倒も減少している。

傾向として、抗癌剤使用後1週間から10日前後での転倒が多い。投与後の副作用で血球減少や倦怠感、熱発などで筋力低下やふらつきの増強があり、転倒のリスクがさらに高まった状況であったと考える。適宜コール指導はしていても転倒をしてしまう要因として、化学療法後の血球減少や熱発のため急激にADLが低下し、そこでコール指導をしても、患者は今まで動いていたからと自ら動いてしまい転倒することが考えられる。入院時だけではなく、適宜コール指導を行い患者の理解を確認すること、遠慮せずにナースコールで介助を求めるよう患者に伝えていくことを継続していきたい。また熱発などの症状に早めに対処し転倒リスクを減らすこと、患者への指導方法や離床センサーの運用について今後検討を重ね、転倒予防に努めていきたい。

参考文献

参考文献:がん化学療法と転倒・転落インシデントとの関連に関する調査 日本病院薬剤師会雑誌48(7):849-852 2012

がん患者および薬剤と転倒・転落事故の関連性について 医療薬学 2009年35巻4号 p. 281-285